



## チャルチュアパ遺跡のフラスコ状ピット出土種子

伊藤伸幸（名古屋大学）

エルサルバドル共和国西部にあるチャルチュアパ遺跡は、幾つかの建造物群に分かれている。そのうちで、最も早い時期に活動が開始されたエル・トラピチェ地区で実施した名古屋大学の考古学調査において、フラスコ状ピット 4 基と円筒形ピット 1 基が検出されている。フラスコ状ピット 4 基は、E3-1 建造物の南側にあった。2 号フラスコ状ピットは、3-2 トレンチ第 9 南拡張区の西端部分で検出された。このピット開口部分で供物の一部と考えられる炭化物の集中部分があった。

この炭化物を水洗選別したところ、種子らしい丸いものがあった。サン・サルバドル市にあるエルサルバドル自然史博物館（Museo de Historia Natural de El Salvador）の学芸員に出土した種子を同定していただいた。その結果、出土した種子 2 粒は、現地名でカプリン（Capulín 和名：ナンヨウザクラ）、学名は *Muntingia calabura* で、出土したのはその果実であることをご教示いただいた。そして、その果実はコウモリも食べるとのことだった。

ところで、メソアメリカのフラスコ状ピットについては、先古典期前期（紀元前 2000～900 年）から後古典期（紀元後 900～1521 年）にかけてみられるが、先古典期中・後期に集中している。先古典期後期（前 250～後 250 年）以降に多くの地域ではみられなくなるが、一部地域ではその後も使われている。メキシコ西部からメキシコ中央部、ゲレロ、オアハカ、そして北部を除くマヤと南東部太平洋側地方に分布し、メキシコ中央部、オアハカ、南東部太平洋側で多くみられる。

フラスコ状ピットはメソアメリカにおける貯蔵施設と考えられてきた。しかし、埋葬、儀礼、ゴミ捨て場となった可能性も先行研究から提示されている。

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で行われた儀礼をメソアメリカでみられるフラスコ状ピットの出土遺物等から考える。













































